

脚折雨乞行事  
保存会



市議会

チャレンジする人を応援する鶴ヶ島に

江戸時代を起源とし、現在では国選択無形民俗文化財に選択されている脚折雨乞。一度は途切れてしまった伝統行事を復活させ、後世に継承している脚折雨乞行事保存会の皆様にインタビューを行いました。



脚折雨乞は、長さ36尺、重さ約3トもある「龍蛇」を作って雨乞いをするのが特徴です。龍蛇は入魂の儀により「龍神」となり、白鬚神社から雷電池までの約2キロを300人の男たちが担いで練り歩きます。雷電池に到着すると、龍神を池に入れ、雨乞いを行います。そして、行事の最後には池の中で龍神が解体（龍神昇天）されます。



● 途絶えた伝統

江戸時代を起源とし、日照りで困った際に行ってきた雨乞いしかし、行事の担い手である専業農家の減少など、社会環境の変化の影響で前回の東京オリンピックが開催された昭和39年に行ったのを最後に、一度は途絶えてしまいました。

● 復活にかけた思い

都市化に伴い人口が急増し、新旧の住民が一つになれることはないかとの声が挙がり、昭和50年に脚折雨乞行事保存会を結成し、翌年に行事を復活させました。

再開の一番の目的は、雨乞いではなく、人々の絆や地域の絆を育むことでした。我々もその想いを次の世代に引き継いでいきたいと考えています。

● 議会への関心

市議会だよりは、しっかりと読んでいます。市の方向性や現状がよく分かるし、選挙で投票した議員もいるので、議員の質問内容も確認しています。

鶴ヶ島市は平和で困りごとも少ないから、多くの人が議会に関心が薄いのだと思います。



● 世代交代が課題

進学や就職に伴い、東京都内などに出て行ってしまおうので、40代や50代の参加者が少なく、担い手の世代交代ができていないことが現在の課題です。

● 行事にかける思い

国選択無形民俗文化財に選択された行事に自分が携われることが誇りです。また、郷土愛を持って活動をしています。

隣人同士でも関係が希薄になっている時代ですが、行事に携わることで新旧の住民に関係なく付き合いができ、地域を一つにしています。脚折雨乞の持つ役割は大きいです。

脚折雨乞は本年9月13日に開催の予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、開催を見送りました。

市議会は市民の声を直接聞きに出かけます！

編集  
後記

お気づきでしょうか。「市議会だより」は毎号新しく生まれ変わっています。第191号（令和2年2月1日発行）から記事の順番を入れ替えました。第192号からは表紙及び裏表紙をカラー化し、様々な活動をする市民や団体が登場し、その活動等を語っていただくシリーズを始めました。また、当初予算を特集し、全議員の「予算の注目点」を掲載しました。

本号はいかがだったでしょうか。議会報編集委員一同は、「市議会だより」の成長に、知恵を出しあいます。（太）

（議会報編集委員）

- 委員長 大野 洋子
- 副委員長 出雲 敏太郎
- 委員 山中 基充
- 委員 小林 ひとみ
- 委員 太田 忠芳
- 委員 石塚 節子
- 委員 内野 嘉広
- 委員 持田 靖明